

時 論

ビヨンド GDP は本当に GDP を超えられるのか

今年 5 月、国連ハイレベル専門家グループが「ビヨンド GDP 計測に関する羅針盤」を公表した。ビヨンド GDP とは、一国の経済成長や所得拡大など主に物量的な豊かさを表す GDP では捉えきれない、国民の健康状態や教育水準、平等さや多様性、環境影響など本質的な意味での豊かさ、いわゆるウェルビーイングを多面的に測ろうとする取組みである。出発点は仏サルコジ大統領(当時)の要請に基づき、ノーベル賞経済学者であるスティグリッツ教授とセン教授らがまとめた 2009 年の報告書に遡る。冒頭で、人々の行動を変えるためには既存の GDP を(捨て去るのではなく)補完し、正しくウェルビーイングの向上を計測できるビヨンド GDP の必要性を訴えた。その後、ビヨンド GDP 計測の動きは世界的に広がり、オックスフォード大学などの「世界幸福度指数」、OECD の「ベターライフ指数」、国連の「人間開発指数」などが公表されているほか、各国独自にウェルビーイング指標を導入する事例も見られる。こうした中での羅針盤公表であり、①人々だけでなく、環境問題を含む地球のウェルビーイングの尊重、②現在だけでなく、将来に向けたウェルビーイングの持続可能性やレジリエンスの強化をうたうなど、決定版としての指針を示すことで加盟国でのビヨンド GDP の導入と実践を強力に推し進める狙いがあると見られる。

今回の羅針盤は①根本原則、②現在のウェルビーイング、③公正さとインクルージョン、④持続可能性とレジリエンスの 4 本柱の枠組みからなり、全 22 の構成要素と合計 31 のダッシュボード指標が割り当てられる。31 指標のうち SDGs(持続可能な開発目標)に採用され計測が進んでいる指標 20 件は先行導入が推奨され、残りの主観的ウェルビーイングや環境の質など計測難度の高い 11 指標は段階導入が期待される。まずは完成度よりもスピード感を優先し、2027 年から加盟国での具体的な取組みが求められ、国連が年次で進捗状況を捕捉するとともに、新興国などには技術的な支援を行うことが明記されている。

今後詰めが必要な論点は数多く残るものの、最大の焦点であり課題となるのは①個人の主観的ウェルビーイングの計測とその反映、および②31 件に及ぶダッシュボード指標の収集と進捗評価であろう。

まず、主観的ウェルビーイングはアンケート調査などをもとに、個人の幸福度や生活満足度を測るものであり、多くの国々で様々な取組みが進められている。その結果からは、1 人当たり GDP の増減と幸福度の高低が必ずしも相関しないという有名なイースタリン・パラドックスの存在が知られている。まさにビヨンド GDP 計測の重要性を裏付ける事象であり、所得分布の偏りや健康・安全面の差異などが要因に挙げられる。一方で、幸福感の受け止め方やアンケートの回答方法に国民性や文化的な違いがあり、それが影響しているとの意見も有力である。実際多くの場合、日本の幸福度評価やランクは国際比較において低めにしがちである。京都大の内田教授によると、欧米人の幸福感は自己実現と結び付き絶対的な高みを目指す「獲得的ウェルビーイング」なのに対し、日本を含む東アジア人の幸福感は一人だけ突出せず周りの人々との相対関係を重視する「協調的ウェルビーイング」と呼ばれる。0~10 の 11 段階のアンケート回答でも真ん中の 5 や中の上の 7~8 に山ができ、平均は 6.5 前後となるが、理想の幸福度を尋ねると平均は 7 程度であり、実際の充足度はかなり高めであることが分かっている。従って、パラドックスすべてを文化的要素で説明するのはミスリードである反面、主観的ウェルビーイングをそのまま鵜呑みにするのも行き過ぎとなる。生のデータや情報をどう補正し、どの程度の割合で反映させるのかが結果を左右する。

一例として、主観的ウェルビーイングを直接計測した「世界幸福度指数」と客観的指標だけで構成した「人間開発指数」を比較すると、対象約 140 か国中、幸福度指数での日本の順位は 61 位なのに対し、開発指数では 23 位と大きく異なる。しかし、幸福度指数のうち 1 人当たり GDP や健康寿命などで十分に説明できない残差、言い換えれば文化的要素を含む部分を除くと、日本の順位は 28 位まで上昇し、開発指数とそん色のないレベルとなる。逆に中南米の国々などは大きく順位を下げる例も見られ、対象国全体に関する両指標の相関係数も 0.83 から補正後は 0.94 にまで高まることが確認できた。主観的ウェルビーイングを織り込んだ指標について国際比較する際はくれぐれも慎重な取扱いが求められよう。

次が、複数指標からなるダッシュボード方式の功罪である。各種の限界や欠点を指摘されつつも、GDP が使い続けられる最大の理由は単一かつ金額換算された集計指標という分かり易さ、時系列や国際間での比較可能性の高さにある。対照的に、今回のビヨンド GDP のように多様性や包摂性を重視して複数指標を並置し、しかも各指標の単位がバラバラのままだと複雑さが増し、ある指標は改善したが別の指標は悪化した場合などで全体としての進捗評価が難しくなる。事実、ハイレベル専門家グループもダッシュボード方式のデメリットを認識し、総合的な「ウェルビーイング・ビヨンド GDP」集計指標の導入を検討したようだが、今回は期限までにコンセンサスが得られず先送りした経緯がある。

ダッシュボード方式の先例となる SDGs は 17 項目の到達点に対し、実に 169 件の数値目標と 243 件の評価指標が採用されている。国連は毎年公式な進捗報告を公表しているが、項目別の進捗度であり、著名なサックス教授主導の関連団体が開示する国別の進捗度ランキングだけに注目が集まる。結果として、肝心の SDGs が目指す社会の姿に近づくために、2030 年までに各国・各人・各企業が何をなすべきなのか焦点が定まりにくくなっているように感じる。実際、SDGs の進捗状況は芳しくない。2026 年の報告書は 169 の数値目標のうち進捗順調なのが 16% に対し悪化・後退が同じく 16% となり、17 の到達点すべてが未達になる可能性が高いと警鐘を鳴らしている。これまでリードしてきた北欧を始めとする先進国の改善が頭打ちとなる一方で、引き続き低所得国の取組みは緩慢なままであり、全体としての進捗停滞と格差拡大が見て取れる。日本も先進国の中では進捗ペースが遅く、相対順位は年々低下してきている。もともと到達点が野心的であり、すべてがダッシュボード方式のよる力点分散の影響ではないとしても、真摯に受け止め推進力を取り戻す必要がある。

こうした考察を踏まえると、ビヨンド GDP 普及の鍵は第一に、主観的ウェルビーイングの重要性を認識しつつも、そのランキングの高低に過度に惑わされることなく、文化的差異を適切に補正しウェルビーイングの実態を見出すことにある。国際間での比較よりも自国の時系列変化を重視し、改善すべき分野・項目を洗い出せるかどうかを試される。その上で第二として、いたずらに個別のウェルビーイング指標の技術的な開発や精緻化などに拘泥することなく、むしろ多元的かつ包括的なダッシュボード指標群の情報をいかに一つの政策ストーリーに変換し、実践していけるのかに注力すべきである。

難度は高いが、国民一人ひとりのウェルビーイングがどの程度満たされ、その向上のためには何が必要であるかが明確になり、国民や企業、政治家が納得して行動に移せるシンプルかつ分かり易いナラティブが示されたときこそ、ビヨンド GDP が本当の意味で GDP を超えるときに違いない。

(調査部 主席研究員 井上 一幸)

※ 本レポートは作成時に入手可能なデータに基づく情報を提供するものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。また、執筆者個人の見解であり、当社の公式見解ではありません。ご質問等はchosainfo@smtbjpまでご連絡ください。